

「京都を学ぶセミナー丹波編」第8回（開催報告）

平成30年12月7日
京都学・歴彩館
075-723-4835

平成28年度から開始した「丹波の文化資源」研究プロジェクトの成果を、分かりやすく解説する「京都を学ぶセミナー【丹波編】」の第8回を、下記のとおり開催しましたので報告します。

記

- 日 時 平成30年12月7日（金）13:30～15:00
- 会 場 京都府立京都学・歴彩館大ホール
- 参加者数 152名
- 内 容
講 演 花園大学 教授 高橋克壽氏
「丹波地方の古墳 ―その特徴と謎に迫る―」

■ セミナーの様子と当日の参加者の声

講演の冒頭に、古墳時代（3～6世紀）とは文字から知られることがない時代で、モノで考古学者が語る時代という特徴が説明された。

一般的な古墳の形状は、前方後円墳、円墳、方墳などに区分でき、時期や場所により周辺に並べる埴輪が変化する。埴輪の種類も様々で、家型埴輪、器材埴輪、人物埴輪、動物埴輪、円筒埴輪など種類がある。埴輪の種類や変遷を辿ることで、埴輪に込められた当時の人々の祈りの内容や、古墳の意義がわかる。また、大きな古墳の周辺に寄り添うように作られる小型の古墳は陪塚と言ひ、大きな古墳の被葬者と主従関係にあたり、非常に近い関係者であることを示すなど、初心者にもわかりやすく説明された。

丹波地方の古墳の特徴は、古墳時代中期（5世紀半ば）に方墳が集中的に造営されたことだという。亀岡の坊主塚古墳から出土した盾持人埴輪をめぐっては、花園大学考古学研究室で復元した様子を写真とともに紹介。復元の結果、和裁のはさみのような頭、コウモリのような耳、目の下の刻みなど、独特のデザインが明らかになった。盾持人埴輪は他府県でも出土しているが、亀岡地域のようなデザインは特例である。

そのほか、埴輪の破片から全体像を推定する際アニメの知識が意外と役立つ、古墳には雪景色が一番似合うなど興味深い話題提供もあり、会場全体が埴輪の世界に包まれた。

